

世界救世教①之光教団 祖霊大祭 教主様お言葉

於：①之光教団本部

皆様、本日は祖霊大祭おめでとうございます。

この度の大雨により、各地で大きな被害が出ております。

ここで、私ども一同でお祈りをさせていただきたいと思えます。

これから、私が申し上げますことを、皆様もご一緒に思っていたいただきたいと思えます。

この度の大雨により犠牲になられた方々、そのご家族、友人知人を始めとして、悲しみや苦しみ、不安や心配、戸惑いや疑いの中におられる方々、また、そのことを、見たり、聞いたり、感じたりさせていただいている私どもも、共に全人類を赦し、救うという主神のみ業にお使いいただいている、と思わせていただきます。

み心であれば、被害を最小限に留めてくださいますように、そして、悲しみを癒し、不安を和らげ、生きる勇気と希望をもって歩ませてくださいますように、と願うことをお赦しく下さい。

私ども一同、全人類とその父母先祖の方々、天地万物一切と共に、赦され、救われ、生きたものとして天国に迎え入れてくださいますよう、明主様と共にあるメシアの御名にあつて、主神に委ねさせていただきます。

み心の成し遂げられますようお使いください。お仕えさせていただきます。

ありがとうございました。

①之光教団の皆様には、皆様を取り巻く教団の状況が大きく揺れ動いているにも拘らず、成井理事長を中心に、明主様を真に求め、明主様が指し示された、全く新しい信仰の学びと実践に一途に励んでおられますこと、大変心強く思っております。

そうした皆様と共に、本日の祖霊大祭を迎えることができ、誠に嬉しく思っております。

本年5月1日、①之光教団いつのめ教区が発足いたしました。①之光教団の皆様には、いつのめ教区発足に至るまで、多大なるご支援、ご協力をいた

だきましたこと、誠にありがたく思いますとともに、今後とも、様々な面において、㊦之光教団の皆様といづのめ教区の方々と共に手を取り、お互いに助け合い、励まし合いながら進んでいかれることを、心より願っております。

いづのめ教区の方々は、そして、多くの海外の信徒の方々は、本年の地上天国祭を期して、明主様のご神名と善言讃詞を変更し、㊦之光教団の皆様が奏上されるのと同じ、「メシヤの御神」のご神名をもってご参拝をされることとなりました。

このようにして、場所や環境、立場などは違えども、共にメシアの御名に結ばれた存在として、心ひとつにメシアの御名をお唱えすることが許されたことに、私は大きな意義を見出しております。

先月、私は、大阪の地で、いづのめ教区の方々と共に、地上天国祭を執り行わせていただきましたが、白澤代表を中心とするいづのめ教区の方々も、皆様と思いを共にして、力強く歩み始めております。

当日ご出席いただきました㊦之光教団の名誉会長である仲泊管長は、ご挨拶の中で、ご自身の歩まれた道のりを踏まえ、㊦之光教団の皆様がいづのめ教区の方々と共に、今後とも全く新しい救いの道を歩んでいかれるご決意を明確に表明されました。

私は今、ご神業が新しい時代を迎えていることを実感し、将来への展望が大きく開けたような感がいたしております。

祖霊大祭を迎えた今日、私は、いついかなる時も、皆様と共に導かれ、養い育てられていることに感謝し、今後とも、皆様と心をつなげて前進してまいり覚悟を新たにさせていただきました。

さて、本日、私どもは、ここ㊦之光教団本部にて祖霊大祭を執り行わせていただいております。

ここで、心しなければならぬことは、主神が私どもの意識の中心に存在する天国において、祭典を開いてくださっている、ということでもあります。

そして、主神は、誠に畏れ多いことではありますが、私どもに対し、地上でも祭典を行うことを赦してくださっている、ということでもあります。

私どもは、自分たちが日時と場所を定めて、祭典を執り行っているように思いますが、今日の祭典を迎えるための、関係の方々によるご尽力もさることながら、主神が時間と空間をお使いになって、祭典を執り行うための日時と場所を整えてくださったことを認めさせていただく必要があると思っております。

祭典は、私どものためにあるものではありません。主神が現れるために、祭

典があるのです。

祭典とは、私どもをご自身の天国に一堂に集められ、その一人ひとりの心をお受け取りになるという、主神の救いのみ業そのものです。

私どもが本日、祖霊大祭を執り行わせていただけるのも、主神が私どもと共におられる先祖の方々を顧みて、天国に集めてくださり、救いのみ業を成し遂げてくださっているからです。

私どもは、全人類とその父母先祖の方々と共に、万物と共に、明主様と共にあるメシアの御名にあって、天国の祭典に参加させていただいていることに感謝させていただきましょう。

私どもは、明主様を通して、全人類がメシアという御名に結ばれていることを知ることができました。

メシヤの御名について、明主様は、

「大救主の御名は最後の世を救ふ尊き御名なり心せよかし」というお歌をお詠みになっています。

ここで言う「最後の世」とは、私どもから見た外側の世界のことではなく、主神の造りのみ業の中で一番最後に創造された、私どもの自我意識のことを示していると思います。

本日の祭典のご参拝の折に、私どもは、メシアの御名を謹んで奉唱させていただきました。

メシアの御名は、主神が創造のみ業を成し遂げるための、主神にとって大切な御名であります。

主神は、天地万物一切の創造をお始めになる前、天国で私どもをお生みになり、私どもに対し、メシアの御名をお授けになりました。

主神は、その御名の中に、ご自身に似た子供を生むという目的と、そのために必要なすべてのご計画を、ご自身の永遠の息と共に吹き入れておられます。

ですから、私どもの中には、メシアの御名と共に、その御名に込められた主神の愛があります。その愛による赦しがあり、救いがあります。

このメシアの御名は、私どもが天国に立ち返るために必要不可欠な御名であります。

私どもは、主神が用意された命の道を通して、天国から地上に遣わされ、この世に生を賜りました。

そして今、メシアの御名にあって、その道を通して天国に帰らせていただけるのです。

私どもは、人間の子供ではなく、神様の子供となるために生まれさせていただいたのです。

そうであるならば、私どもは、すべてのものと共に、メシアの御名にあって、赦され、救われたものとして、すべての源である天国に立ち返らせていただき、“全人類をご自身の子供とする、”という主神の創造のみ業にお仕えさせていただく務めがあると思います。

この主神のみ業にお仕えさせていただくことが、明主様が指し示された「地上天国建設」や「人類救済」の御用に真にお仕えさせていただくことである、と私は信じております。

私は、明主様が最晩年に、“メシアとして新しくお生まれになった、”というご事蹟をお示しになったことを思いますと、地上天国建設、人類救済を始め、明主様がお説きになったすべてに、私どもをご自身の子たるメシアとして新しく生まれさせるという主神のご意志が貫いていると思わざるを得ません。

主神は、メシアの御名をもって全創造をお始めになり、今も一瞬たりとも滞ることのない創造のみ業をなさっているのですから、私どもがメシアの御名を心に思い、その御名をお唱えさせていただくことは、主神をお讃えするための、大切な礼儀であると思います。

明主様は、お歌に「大神の^{いさお}勲し高く褒め讃ふ清き言霊天地に響かむ」とお詠みになりました。

主神は、私どもがメシアの御名をお唱えすることを赦してくださっているだけではなく、私どもが発するメシアという御名を清き言霊としてお受け取りになるとおっしゃって、私どもに臨んでくださっています。

主神は、私どもにメシアの御名を唱えさせ、その言霊の波動をお使いになって、主神の赦しと救いの力を天地万物一切に波及させ、ご自身のみ心を浸透させてくださっているのではないのでしょうか。

私どもは、明主様が「尊き御名なり心せよかし」とおっしゃった尊いメシアの御名を、心から大切にさせていただかなければならないと思います。

また、私どもは、世界救世教のマークを、胸に付けるバッジやいろいろなところで使わせていただいております。

2カ月程前の5月4日、大阪において執り行われました、いつのめ教区の方々と合同での信徒大会においても、私どもは、このマークに向かってご参拝をさせていただきました。

この世界救世教のマークは、明主様のデザインに基づくものでありますが、

このことについて、皆様にお伝えしたいことがあります。

明主様は、64年前の昭和29年6月15日、九分通りできあがった、元の救世会館である「メシヤ会館」において、「メシヤ降誕仮祝典」を挙行されました。

明主様は、真っ白な和服のお姿でお出ましになり、舞台正面に据えられた椅子にお座りになりました。

その時、明主様の背後に置かれた金屏風の後ろの幕には、世界救世教のマークが掲げられておりました。

また、記録によりますと、当時の理事長が明主様のみ前に進み出て、明主様に向かって、「メシヤ様、全人類の罪をお赦しくくださいますようお願いいたします」と申し上げ、それを明主様は、うなずかれてお受けになったとのことでもあります。

その後、信徒一同、天津祝詞を奏上し、その場に参列した信徒は、嬉しさのあまり涙を流し、その時の感動と喜びは大変なものであったようであります。

私は、明主様が全人類の罪をお赦しく下さいという願い出に対してうなずかれたということは、明主様は、全人類を代表して、メシアの御名にあって、主神に罪の赦しを請い願うべく、私どもの願い出を主神に取り次いでくださり、“全人類の罪を赦す、”という主神からのお返事をお受け取りになったのだと思います。

私どもは皆、この仮祝典に立ち会わせていただいたはずであります。

立ち会い、私どもの罪をメシアの御名にあって赦していただいたはずであります。

私どもは今、そのことを思い出させていただき、全人類の願いを主神に取り次いでくださった明主様に感謝し、そして、メシアの御名にあって私どもを赦してくださった主神の愛に目覚める必要があるのではないのでしょうか。

私は、この世界救世教のマークは、私どもの中にある、私ども自身の姿であると思います。

このマークに中心を示す丸があり、その中心から四方八方に線が伸びており、そのすべての線を外側の大きな丸が包んでいるということは、私どもの中心には、主神がお座りになっており、私どもがどのような境遇や心境にあらうとも、私どもをご自身に結んでくださって、その大きな愛のみ手の中で私どもを養い育てておられる、ということであると思います。

このマークのように、中心に向かう線がたくさんあるということは、私ど

もが今どこをさまよい歩いていようとも、主神は、私どもの中に、天国に立ち返る道を用意してくださっている、ということであると思います。

その道こそ、メシアの御名であります。

私どもは、メシアの御名にある赦しがあればこそ、無条件で、主神のみもとである天国に立ち返ることができ、主神の子供として新しく生まれさせていただくことができるのです。

天国は私どもの中にあります。その天国が私どもの命のふるさとであり、主神が、そして、明主様が、私どもと共に住んでくださる家であります。

私は、この度、ドヴォルザーク作曲の交響曲「新世界より」の中の、一般に「家路」として親しまれているメロディーに、僭越ながら、私なりの歌詞を付けさせていただきました。

この曲は、ドヴォルザークがふるさとに帰る日を夢見て作ったとも言われております。

私どもの本当のふるすとは、私ども一人ひとりのうちに燦然と輝く、永遠の天国です。

その天国が、主神の家であり、主神は、私どもと共に永遠に住んでくださろうとしておられます。

私どもは、天国で主神と共に住まわせていただけるというみ恵みを賜っていたことを思い出し、その天国に立ち返り、明主様を模範として、主神の子たるメシアとして新しく生まれることを決断しなければならない時を迎えているのではないのでしょうか。

私は、主神と明主様が、天国にある“神の家”にいらっしゃって、私どもの帰りを首を長くして待っておられる、と思えてなりません。

本日の祭典の最後に、私どもは、「偉大なる御光」と「家路」とを一同で歌わせていただくことになっておりますが、私どもが歌うその歌声に乗せて、主神と、主神の子たるメシヤとして新しくお生まれになった明主様に、心かなる感謝の思いを捧げさせていただきますよう。

そして、明主様と共にあるメシヤの御名にあって、天国に立ち返らせていただき、その天国において、明主様を先頭に、すべてのものと共に、主神の全く新しい救いのみ業にお仕えさせていただきますよう。

ありがとうございました。

以上